

## 釈尊ご入滅後の仏教教団の動向

### 釈尊の葬儀

釈尊のご在世中の在家の信者に比べると、むしろご滅後の人々の残した遺跡や資料が多く残っていて、在家の宗教活動として跡付けることができます。

それは信仰という事柄を考えてみれば当然のこと、信仰の対象として象徴的な存在であったみ仏が現に目の前におられるご在世の時代より、亡くなられてその姿をお隠しになった後の方が求める心は強くなり信仰心は強くなるものです。これは自分自身の親の場合を考えてもよく分かることで、生きている間は口答えをしたり、逆らったりしても、いざ亡くなると急に不孝を詫びる気持ちが出てきて孝養と尽くしたくなるもので、「墓に布団は着せられず」とか、「親孝行したい時分に親はなし」という諺が残っています。しかし、実際は親がなくなったから親孝行の気持ちが沸き上がってくるのであって、年齢が相当になっても親が存命であれば安心をしてしまい親孝行の気持ちは起きにくいものです。その辺の事柄も法華経の中にちゃんと説かれていて、なぜ、絶対的な信仰の対象であったみ仏が姿をお隠しになるのか、それは如来への信心、喉が乾いた人が水を求めるような渴仰の思いを起させるためであると説明をされています。

話を元に戻しますが、その釈尊のご入滅後ほどなく信者たちがとった信仰行為の代表が仏蹟の巡拝と仏塔（stūpa 率塔婆）の崇拝です。仏像の崇拝をするようになるのはもっと後のことです。

仏蹟として仏陀誕生の地であるルンビニー、成道の地、ブッダガヤーと初転法輪の地、サールナート、般涅槃の地、クシナガラ、これらは四大霊場として尊崇されブッダを慕う仏教徒の巡礼の聖地として栄えました。そして、それらの地には、霊廟（制多 caitya）が建てられました。霊廟も仏塔も外見上は極めて近く、ただ中に遺骨を収めてあるかどうかで分類するといわれています。

釈尊の遺骨を収めた仏塔と大乘仏教の関係については、平川彰博士が仏教学会で最初に指摘をされて、仏塔に関する事実と歴史を克明に述べておられます。私が特に注目したいのは、その仏塔の建立に先立つ釈尊の葬儀に関することです。

パーリ語の大般涅槃経によると、まさに涅槃に入られる釈尊は阿難に向い、出家の弟子達が釈尊の遺骸（舍利）の葬儀を行うことを禁止して「汝らは最高善のために努力せよ」と遺言をされ「信心の篤いバラモンや居士の賢者達が如来の舍利供養（sarīra-pūja）をするであろう」とのべられたと出ています。また、実際にブッダの滅後にその遺骸を受け取り供養をしたのは在家の信者、クシナガラのマッター人であり、その後、如来の舍利は中インドの八つの部族に分けられて、八つの骨塔、一つの灰塔と一つの瓶塔が建てられたといわれます。しかし、釈尊の舍利の八分については、どの部族がどのように分配をされたかは諸伝に依って相違があり真相は突き止め難いのです。人によっては釈尊の歴史における実在さえ伝説視をしていたのですが、1898年にカピラヴァットゥ（カピラ城）から約13キロ離れたピプラーワーにおいて実際にイギリスの駐在官であるペッペにより釈尊の遺骨を収めてある壺が発見され、釈尊が歴史上確実な存在であることが確かめられました。ですから舍利の分配自体は事実であることが確認されたのです。

この在家の手に釈尊の遺骨が託されたこと、更に仏塔が建立されたことが後の仏教の展開に非常に重大な展開を促すことになったと考えられます。不思議に思うことは、なぜ僧伽の構成員であり釈尊滅後の指導適役割を果たさなくてはならない比丘、比丘尼に釈尊は葬儀に携わることが禁じて、在家の手にこれを委ねたのでしょうか。私は法華経の中に、釈尊がみ仏の滅後の法華経の弘通の担い手を募り、「誰かこの娑婆国土において仏に代わって広く妙法蓮華経を説くものはないか、今や法華経を譲るときが来た。仏はまもなく涅槃に入る。仏の滅後に私に代わって妙法蓮華経を説かんとするものは名乗り出よ」といわれ、これに応じてこの娑婆に古くからいる二万の菩薩がご弘通を誓い、さらに八十万億という数多くの菩薩が三類の強敵による難を忍んで法

華經の弘通を誓いますが、仏はどんなに忍耐強くとも三類の強敵に堪えられることは困難であるところらの菩薩にふさわしい安楽な修行法を教えられ、さらに他方の国土から来た八恒河沙（ガンジス川の砂の数に更に何倍も多い 八は満数）の菩薩が「もし仏様がお許しになられるなら、仏滅後にこの法華經をお弘めしたいのです」と申し出たとき、「止みね、善男子」と言われ制止して、その後、上行菩薩等の地涌の菩薩（娑婆世界の下の方から涌き出した菩薩）を召し出して、その手に法華經のご弘通を委ねられたことを連想いたしました。

中村元博士によれば、釈尊は一般の葬儀に関して冷淡でその意義を認めていないことがパーリ語聖典にしばしば説かれていると述べて居られます。（中村元選集 15 春秋社）また、一説によれば釈尊のご在世の時代は通例として出家者は父母あるいはサンガの中の死者以外は葬儀に携わらないという原則だったとも言います。それは出家者は専ら「上求菩提、下化衆生」つまり上はわが菩提（さとり）を得るために、下は一切の人々を教化するために修行に励むのを理想としていたからであると言われていいます。葬式仏教への墮落を防ぐ意味からだったのでしょうか。

しかし、これとて部派仏教の出家たちが中心となって編纂された經典に出てくるものですから、果たして釈尊が葬儀自体の意義を全く認めていなかったかどうかは大いに疑問です。もし、そうであるなら在家の信者達にも禁止されたのではないのでしょうか。ですから、自らの葬儀に関わることを釈尊が低劣なこととされ出家に遺骸の供養をさせられなかったわけではないでしょう。また、サンガの中の人の葬儀には出家も関わったということになれば、釈尊ご自身の葬儀から出家を排除されたというのも矛盾しますから、そこに何かの意味があると思わざるを得ません。

また「浄飯王涅槃經」には釈尊が父の浄飯王の死に際して、報恩の範を示すために釈尊自ら棺を担おうとされ、更に荼毘に付して遺骨を金匱に納め塔を建てて供養したという記述があります。また、「増壹阿含經」第五十巻によれば、釈尊は姨母の大愛道の葬牀をみずから担がれて至孝の誠を尽くされたと述べられています。これでは意

義を認められなかったどころではありません。

ちなみにインドではガンジス川に遺体を投げ入れる水葬のほか土葬、林葬(鳥葬 鳥に遺骸を啄ませる)が行われていましたが、尊貴な人の葬法は火葬によるべきものとされ釈尊はご入滅後、遺体は白布で巻かれ荼毘に付されました。火葬の風習は古代よりインド文化圏で重んぜられてきました。釈尊の火葬に倣って、仏教徒は火葬をするようになったそうです。

そこで釈尊が自らの葬儀を在家の信者に任せたという記述は、もしこれが真実であるなら、そこには深いお考えがあったことでしょう。それは仏滅後の仏教展開のプログラムを釈尊おん自らが書かれていたからではないかと思えます。

つまり、入滅をされた後、追慕の情から一段と仏陀の徳を慕う信者達に大乘仏教的な信仰につながる動きや思潮が盛んになりましたが、出家を退けて在家の信者を選んで葬儀を任せることが、そういう動きを巻き起こす決定的な要因となっただけではないでしょうか。しかし、一定の期間は出家者が中心となってヒンドゥー教の支配的なインドで仏教の伝道をすることも又、必要なこととされたのでしょう。果たせるかなインド各地に派遣された出家者による伝道が基盤となって、まず部派仏教が弘まり、その後、大乘仏教もインドのそれぞれの地域に流布され、出家仏教(部派仏教)による教理の研究が大乘仏教の理論の基礎として、精緻な教理がそのまま役に立つことになったのです。そういう順序を「仏法流布の序」と御祖師様は仰っています。そのような釈尊ご自身のご弘通のプログラムがあったればこそ在家の人々に自らの葬儀を任せて、出家には自己の修養に専念するよう言われたのではないのでしょうか。